

題目

留学生はいかにしてホスト社会日本との接点を形成するか
ー日本での留学と就職活動の経験を持つ中国人へのネットワーク調査ー

要旨

本論文は、日本での留学と就職活動の経験がある中国人は日本というホスト社会とどのように接点を持っていくのかという議論を試みるものである。留学生など中流階級として入ってきた中国人が日本に定着する過程でどのようにネットワークが変化していくのか。また、就職活動に代表されるような、その先の人生を決めるような重要な場面で、ホスト社会とどのような接点が役立つ情報をもたらすのか。ネットワーク分析およびナン・リンによる社会関係資本に見られる考え方を参照して明らかにすることを目的としている。

現在日本で生活する外国人のなかでは、中国籍人口が最も多く、在留資格別にみても、「留学」と「専門的・技術的分野」に該当する者はいずれも、中国人の割合が一番高い。また、労働人口の不足が懸念される日本において、外国人人材受け入れの期待も高まっており、日本政府は優秀な留学生を戦略的に獲得していくことに努めている。しかしながら、これまで日本にくる外国人についての先行研究では主に単純労働者やエスニックネットワークについて議論されてきた。それに対して本論文では、日本に留学経験がある中流階級の中国人を対象とすることに特徴がある。

特に注目したいのは、留学生は学歴や日本語学習経験などの人的資本を持っているが、ホスト社会に根付くためにはホスト社会の情報や資源が必要で、人的資本だけではカバーできない社会関係資本が必要だと考えられる点である。どのようなネットワークに取り囲まれるかによって、同じレベルの人的資本を持つ留学生の行為や思考にどのように異なる影響があるのかを明らかにすることが重要になってくる。自分と異なる社会的地位を持つ人たちとの異質的相互行為が個人によりよい資源をもたらすとリンは論じる。特に就職という場面は、留学生にとって日本社会の情報と資源が必要となる。それは、自力での勉強と留学生同士とのつながりだけでは、獲得しづらいものである。よって、留学生が日本に来た時点からのネットワークの変化を質的に調査することで、重要な場面で役立つ情報をもたらすホスト社会との接点を明らかにしようと試みた。

具体的には、東洋大学および東洋大学と近いレベルの日本の大学または大学院を卒業した後、日本で就職した又は就職活動をした経験を持つ 20 代から 30 代前半の中国人に、来日後の各時期の社会的ネットワークの変化を、半構造化インタビューを通して語ってもらう、仮説探索的な調査を行った。そこから得られた主な結果は、以下の通りであった。

まずは、中流階級として入ってきた留学生は、そもそも日本社会と接点を持つのが難しい。それを持つためには、大学やバイトにただ通う以外の行動を起こすことが必要となる。例え

ば、大学やアルバイト後に日本人メンバーとやりとりをしたり、興味関心を通じて同好会やボランティアなどのホスト社会の組織に参加したりすることで、留学生は自分と異なるライフスタイルや社会的地位・資源を持つホスト社会の人たちとの間に、異質的相互行為を発生させることができていた。この行為によってホスト社会とのネットワークを形成できれば、留学生は日本社会に埋め込まれた資源にアクセスすることが可能になっていた。

しかしながら、ホスト社会とのネットワークが形成されても、留学生により良い情報・資源に自動的にもたらしてくれるわけではなかった。自分と異なる社会的地位を持つ人たちと関係を有していることは、その人たちが持つ資源・情報を潜在的な社会関係資本として有していることであり、いざとなったらアクセスできるという意味である。

また、日本社会とのネットワークを持っていなくても、エスニックネットワークへの参加によって、自分と似たような社会的地位・資源を有している人たちと同類的相互行為が行われているケースもあった。このケースは単純労働者として来日した外国人にも当てはまりやすいと考えられる。それに対して、留学生がホワイトカラーとして日本で就職をする場合は、日本社会への定着・適応をより強く求められるというハードルがある。

以上の調査から得られた考察をまとめたい。留学生が日本社会と接点を持つていくにあたっては、第一段階として、異質的相互行為によって自分と異なる社会的地位を持つホスト社会の人たちとネットワークを形成する必要がある。つまり、まずはネットワークに埋め込まれる潜在的な社会関係資本への投資が必要になる。そのうえで第二段階として、形成したネットワークを通してホスト社会の人たちと異質的相互行為を行うことで、さらなる資源の獲得という道具的な目的が達成される。つまり、ネットワークを社会関係資本として活かすというプロセスである。第一段階のプロセスを達成できた留学生は、日本社会に埋め込まれている情報にアクセスできるようになる一方、達成できなかった場合は、そうした情報にアクセスできていなかった。また、第二段階の社会関係資本の活性化を達成できた人は、就職をめぐるホスト社会の情報・資源を獲得し、納得できる就職ができていた。ただし、ホスト社会とのネットワークを形成していてもそれが就職活動という場面で社会関係資本として活かされなかった人や、エスニックネットワークの中で課題を解決できた人もいた。

これらの考察から、自分自身の交際圏を乗り越えたネットワークを形成できれば、ネットワークに埋め込まれた社会的関係資本を活かすような道具的行為を通して、就職などにおいて納得できる形で日本社会に定着することも可能になると結論付けられる。しかし、そのような行動をとることができるケースばかりではなく、日本において留学生がホスト社会との接点を築くことはやはり容易ではないことが、本論文からは明らかになったといえる。

以上のことから、先行研究に不足している、留学生の日本社会との接点の形成過程の解明において、ネットワーク分析や社会関係資本の概念による検討が可能であることを示し、留学生のパーソナルネットワーク研究という希少性のあるアプローチを図った点に、本研究の意義があると考えられる。